

小説1~4巻
書籍・電子書籍
好評発売中!

文: 桜井光 イラスト: 中原
原作: TYPE-MOON

ついに聖杯はその手に。
その時、騎士王が想うは――

「Fate/Prototype」前日譚!
1991年の聖杯戦争を描く
スピンオフ小説
いよいよ最終第五部、開始!!!

Fate Prototype

蒼銀のフラグメンツ

第五部『Knight of Fate』ACT-1

死者は蘇らない。
なくした物は戻らない。
いかな奇跡と言えど、
変革できるものは今を生きるものに限られる。

末世に今一度の救済を。
聖都の再現。

王国の受理。

徒波の彼方より、七つの首、十の王冠が顕れる。

罪深きもの。

汝の名は敵対者。

そのあらまは強欲。

その言祝ぎは冒涇となつて吹きすさぶ。

遍く奇跡を礎に。

此処に逆説を以て、失われた主の愛を証明せん。

Fate/Prototype

蒼銀のフラグメンツ

[Knight of Fate]

海辺の何処か、喫茶店らしき場所にて――

数年前に流行した洋楽が響いていた。

ラジオカセットレコーダーやレコードプレーヤーといった音響機器の類は周囲に見当たらないから、きっと有線放送によるものだろう。

日本でも大ヒットしたアメリカ映画の主題歌だ。女性歌手による躍動感ある歌声は、少年たちが海賊の宝物をめぐって冒険を繰り広げるといふ映画の筋立てとも相まって、多くの聞かざる者の胸を躍らせる。店内で穏やかな午後を過ごす客層の中にも、表情を明るくして曲に耳を傾ける様子がちらほらと見受けられる。

けれど、窓辺のテーブルに着いた二名については反応が異なる。
「どうして、聖杯なのかしら？」

ひとりして少女。

流れる旋律に気を向ける素振りはない。

翠色のドレスに身を包んださまは優美の一語に尽きる。

ティーカップを手にした上品な仕草、穏やかな表情、いずれも俗世からは距離を置いた風ではあつて、流行の映画なり洋楽なりを果たして認識しているのかどうか。大衆の集まる映画館に足を運ぶ、といった想像はし難い。強いて言えば、自分の屋敷の映写室で白黒のフィルムを映写機にかける方がそれらしいか。

少女の名は沙条愛歌。

西暦一九九一年二月某日現在、魔術協会及び聖堂教会によって確認される中では唯一残つたマスター、枢機卿によって持ち込まれた大小の聖杯を恐らくは掌中に収めたと思しき聖杯戦争の事実に勝者である。

地下大聖杯を用いた儀式を完遂すれば、少女は自らの願いを叶えるだろう。

――

卓を挟んで座るもうひとりとは、男。青年。

金髪碧眼の外見からすると、異国から訪れた人物のようではあるが。

人間。いや、違う。

彼は間違いなく人間以上の存在であり、その身に秘められた魔力、膂力、技能、その特性の多くは通常の生物を遙かに超えている。言うなれば人型を保った戦闘用の兵器であり、人類史の中で洗練された筈の多くの現代兵器をも凌駕するだろう。振るわれる剣は万物を両断し、そして、それから逃れられるものは多くない。

彼は、英霊だ。

正確にはサーヴァントと呼ばれる存在である。

絵空事に過ぎない伝説を、神話を、空想を、人々に夢想された共通の幻想を、聖杯の力によって現代に再現――現界させたもの。最強の幻想、神秘の窮極であると言う者もいるし、事実としてそう称されるだけの性質を有している。

コーヒークップを片手に少女と語らっている現時点では、身に纏う服装の印象は黒。

だが、英霊としての真価を発揮した際の印象は、蒼と銀。

蒼銀の騎士。

「蒼銀のフラグメンツ」
あらすじ

聖杯戦争――あらゆる願いをかなえる願望機・聖杯を懸け、七人のマスターが七騎のサーヴァントを従えて戦う。一九九一年の東京で発生した聖杯戦争では、沙条愛歌がセイバーと契約し聖杯戦争に参加していた。愛歌はセイバーを見るなり心を奪われる。そして故国・ブリテンを救うというセイバーの願いを叶えるため戦う。愛歌の手に堕ちたキャスターとアサシンを除き、すべてのサーヴァントは退場した。いま彼女の目に映るはセイバーのみ。ついに彼の、そして彼女の望みが叶う――。



セイバー (1991年)
愛歌のサーヴァント。伝説の騎士王、アーサー・ヘンドラゴン。故国ブリテンの救済を聖杯に願う。



沙条愛歌 (1991年)
セイバーのマスター。天性の才能に恵まれた魔術師。セイバーの願いのために聖杯を求める。

聖杯及びマスターである愛歌によって召喚された、最優のサーヴァント。割り当てられたクラスは騎士。

彼は、沈黙していた。

少女の唇が紡ぐ声を、言葉を、静かに聞き届け続けている。有線放送から奏でられる音楽へと耳を傾けてはいないだろう。他のテーブルの客たちが懐かしさに微笑んでも、数年前には自分たちも映画の主人公のような冒険を夢見たものだと思いついても、その楽しいな空気を感ずることもない。

少女と青年。二者が向かい合うテーブルは、外界の多くから遮断されている。

実際にその類の結界が施されている訳ではないまでも、まるで結界の内側のようではあつて、漂うのは絶対的なまでの安寧と穏やかさ。七人七騎によって行われてきた、極東都市・東京に於ける殺し合いの果てに辿り着いた何かの果て——或いは、更にその向こう側にあるかもしれない終局への、僅かな予感か。

「奇跡を起こす、願いを叶える……」

そんな素敵な魔術なら、もっと平和的な儀式でいいと思わない？」

少女が——愛歌が言った。

それこそ、流れてくる有線放送を指して告げる程度のささやかな口振りだ。

「セイバー？」

彼の名を呼ぶ。

真名ではなくとも、仮初めの現界に際するクラスを示す単語に過ぎなくとも、確かにそれはサーヴァントとして在る彼を示す名ではある。だからこそ、それを口にする少女の瞳は潤み、頬には赤みが差す。

万人が気付くだろう。

ああ、この可憐の花が如き少女は彼に恋をして、いるのだろう、と。

「そうだね。聖杯は血を注ぐものじゃない」セイバーは静かに応える。「本来は形として観測できない奇跡、人々の願いを溜めるためのものだ」と聞いた。それが満たされた時、主の威光が満ち溢れるのだと」

「ふふ、それじゃまるきり反対ね。願いが溜まらないと聖杯は起動しない、なんて」

愛歌は笑う。

想い人が、思いがけない冗談を口にしたかのようにして。

けれど実際のところ、両者の会話は、ティータムの他愛ないやり取りとは到底言えないものではある。東京の何処に隠された地下大聖杯、すなわち枢機卿によって秘密裏に持ち込まれた模倣聖杯の存在は紛うことなき現実であり、聖杯戦争が今まさに終局を迎えようとするこの時、万能の願望機は真に稼動するのか。聖堂教会が語るように、小聖杯と大聖杯から成る儀式は万物の「根源」への到達さえ可能とするのか——

それとも。或いは。

「……………」

セイバーの瞳に何かが浮かぶ。

碧色の瞳は、決して、テーブル越しに微笑む少女を映すだけではない。

この瞬間、彼は、臉を閉じて己の記憶をこそ注視する。

東京に散っていった英雄たちの残滓を、蒼銀の騎士は思い返す——



魔術儀式・聖杯戦争。

魔術師と英霊による七陣営、七人七騎の殺し合い。

空前絶後にして神話の再現にも等しいサーヴァントの猛威、破壊の力は凄まじく、自ずと戦闘及び影響の規模は拡大していく傾向にあると言えるだろう。

だが、決して思い違いをしてはならない。

聖杯戦争は戦闘のみを指すものではない。

聖堂教会を主とした今回の呼び掛けに魔術協会が応じた真の理由を忘れるな。

模倣聖杯●●●号。

ある意味では最高の聖遺物とも言えるはこそが、儀式の中心である。

つまり、我々魔術師にとっての大願。根源への渦への到達。

聖堂教会——

有り体に言えば某枢機卿の言うところ、聖杯は万能の願望機であるという。

召喚される七騎の英霊、奇跡とも言うべき有り得ざる召喚のかたちを、絶大な魔力と神秘とを湛えた彼らの魂を捧げることで聖杯は真に起動する。願望機として。

英霊たちは単なる戦闘兵器ではない。

事実、聖杯戦争に於いて彼らの戦闘性能は大いに頼るべき要素ではあるが。

あくまで、それは一要素に他ならない。

魔術儀式としての聖杯戦争に於いて、英霊とは、最終的な儀式の触媒である。我々が願い、根源へと到達するために七騎の魂を聖杯へくべねばならない。



バーサーカー

異のサーヴァント。正体はヘンリー・ジキル／ハイド。異の正義感に賛同し、聖杯戦争を止めようとした。



来野異

バーサーカーのマスター。凡人として生きてきたが聖杯戦争に参加することに。魔眼の持ち主。

是は厳然たる事実でありながら、同時に最高の機密として、聖堂教会及び魔術協会が共に語るものである。(本質的に触媒に過ぎぬ英霊に対して「お前の願いも叶える」と我らは虚偽を以て召喚している以上、やはり是は機密である)

或いは。

根源への到達を望みとするのでなければ、或いは六騎の魂で事足りようが——この記述を読むものは大願を秘めた我が家系の者と信じ、多くは言うまい。

改めて、心せよ。

戦闘、闘争は聖杯戦争の一面にすぎず。

喩えば、七騎のうち四騎を打ち倒し、自らが召喚した一騎に加えて二騎を(説得等の何らかの方法により)仲間に引き入れる、等の事態があったとしても。儀式としての聖杯戦争は終了していない。

七騎を、或いは六騎の魂を聖杯へくべよ。

奇跡として召喚された英霊たちを、奇跡のために悉く殺せ。それこそが、聖杯戦争の本質である。

(古びた一冊のノートより抜粋)

光。輝き。灼熱。

再生されるセイバーの記憶。

それは、眩き光に塵と消えていった狂獣の姿。

最初に遭遇したのも、最後に出逢ったのも、同じ場所だ。杉並区玲瓏館邸。恐らくはキャストとそのマスターの拠点であると思しき玲瓏館邸に、バーサーカーは幾度となく襲撃を仕掛けていた。目的はキャスト陣営の打倒であったのだろうが、敢えなく狂獣は聖杯戦争から脱落する結果となった。

セイバーが抱いた最初の印象は、やはり、荒れ狂う獣だった。

自分にとっては過去の戦いの記憶、現実で語るならばブリテン王の伝説に記される、喰る獣を思わせた。蛇の首と頭、獅子の体、鹿の足を持った歪みの魔獣、憎しみと悪意を凝集させて吼え猛る森の巨獣の在り方は、バーサーカーのそれに近しく見えたのだ。

視界に入るすべてを憎み、嫉み、牙を突き立てんとする悪意の異形。

玲瓏館家の令嬢と思しき幼子を前にして、巨大な顎を開き、鋭い鉤爪を以て迫るその姿はまさしく魔のものであり、剣によって対するに相応しい相手と認識した。

だが、玲瓏館邸の黒い森にて数合切り結ぶうち、セイバーの認識は変化していった。(……彼は、自ら意図して正気を失っている)

確信だった。

全身全霊を懸けて、魂さえ懸けて、この獣は狂獣として在ろうとしている。

聖杯戦争を勝利するためか、願いを叶えるためか、その裡に秘めた最終的な目標までは分からないが、意図的な狂気が見て取れた。サーヴァント階位二位たるバーサーカーのクラスに相応しい、それは強力な指針であると同時に有用な武器でもあるのだろう。

大義のためには悪と誹られようと構わず、と——

鋼鉄の意思を秘めた瞳には、以前にも心当たりがあった。

(アグラヴェイン。ここで卿を思い出すのは、不思議なものだ)

かつての自らの配下にして同胞たる円卓の騎士の横顔を想いながら、セイバーは狂獣の存在を自己の中で定義した。あれは、ただの獣などではない。魔獣でも、悪意の塊でも、欲望の具現でもなく、何らかの意義のために力を携えて現界を果たす歴としたサーヴァントの一騎であるのだ、と。

無論、アグラヴェインは獣の外見を有してはいなかったし暴力的な人物でもなかった。単に在り方の問題だ。

瞳の奥に窺える、意思の光が僅かに似て見えた——

たったそれだけのことであったが、確信に至った。戦場における直感には些か自信のある身という事実を差し引いても、この判断には自信が持てた。だからと言って相手との対話が可能となった訳ではなく、こちらにも剣速を緩めはせず、停戦も手加減も叶う状況ではなかったが、それでも。

獣狩りではなく、誇りある戦いを行うに足る相手の筈だ、と信じた。

だからこそ、再戦の折には一対一の戦いを望んだのだ。

「これは私の戦いだ。叶うなら、手出しはしないで欲しい」

しかし、望みは叶わず。

事前に霊核を貰ったのはセイバーの剣撃ではあったが——

ランサーの巨槍のもたらす奇襲の一撃、黒い森に姿を隠したアーチャーによる無数の遠隔攻撃、そして飛翔する「船」によって姿を見せたライダーによる死の光。空から降り注ぐ無尽蔵にも思える魔力投射によって、狂獣は崩れ、地上から消え果てたのだ。

最期、夜空に向かって伸ばされた鉤爪。

あれは何を意味していたのか。



アーチャー

エルザのサーヴァント。古代、ベルシャに於ける伝説の弓兵・アーラシヨ。ライダーの神殿攻略時に消滅。



エルザ・西条

アーチャーのマスター。日独のハーフで二〇歳手前。表向きの身分は報道力メラマン。

今もセイバーには、正確なところは分らない。

真名さえ知らず、恐らくはバーサーカーであろうという予想だけを情報として得ている状態で、言葉を交わしたこともない。ただ、その在り方と姿とを記憶しているのみ。一度たりとも背を向けず、複数のサーヴァントへと同時に立ち向かわんとした蛮勇を、狂気を、ある種の純粹を、儼い美しさと誇り高さの結晶の如く感じながら。

——大電光。一条の流星。

再生される第二の記憶。

それは、東京湾上に於ける決戦で激突した神王と弓兵の姿。

前者、すなわちライダーについては神殿内では目撃できなかった。セイバーが彼を明確に視認したのは神殿決戦以前、一度目はバーサーカーが最期を迎えた玲瓏館邸、そして二度目は愛歌と共にランサーと遭遇した沙条邸近くの某公園にて。神獣スフィンクスを従えて夜空に君臨する神王は、こう言ったのだ。

「世界を喰らう女神と、それを守らんとする騎士よ。余は、今宵、余がこの当世にて成すべきを今知ったぞ。お前たちを屠るために、余は此処に在る」

自分をではない。

少女を、愛歌を目にしながら彼は言っていた。

オジマンディアス。己が真名をも高らかに宣言しながら、ライダーは言うのだ。

正義を為すために。極東の都もろもろもすべての邪悪を灼こう——と。

あの言葉に心当たりはあるかと問うセイバーに、愛歌は曖昧に微笑み返しながら、聖杯戦争を続ける以上は他の英霊からあして敵視されるのは当然、といった旨の言葉を告げてはいたか。

愛歌の言葉をセイバーは信じた。

否、その言葉は一面では正しいのだらうと認識し、けれども自分に告げていない何かが秘されているのだらう、とも同時に認識せざるを得なかった——

沙条愛歌。セイバーのマスターである少女。

才ある魔術師という一言では表現しきれない程の何かを彼女は有している。

それは、アサシンに続いて、あのキャスターまでもが軍門に下っている現状を見れば明らかだ。サーヴァントとして存在するセイバーの性能では把握しきれない、魔力だけではない何らかの魅力、或いは力を秘めているかと思しい。

感知や調査に長けている訳ではない我が身を憂えたが——

愛歌へと意識を傾ける時間は、そう長くは保たなかった。

「余は決断したぞ！」

星さえ喰らわんとする邪悪、余と神々の威光によってすべて焼き払ってくれよう！」

神王は、一千万を越える市民ごと東京を焦土へ変えたと宣言し、その大言壮語を実行するに足る存在を实体化させたのだ。つまり、東京湾上に突如として出現した巨大構造物、神祕の頂点のひとつとして魔術師たちの世界で語られる固有結界、ライダー最強の宝具と思しき「光輝の大複合神殿」である。

残された時間はあまりに少なかった。

神王の宝具は、湾上に鎮座しながら東京全域を狙っている。

故に、セイバーは単身で大神殿へと乗り込んだ。ライダーの意向がどうあれ、愛歌の在り方がどうあれ、聖杯戦争には無関係どころか無辜である筈の民の多くを死なせる訳にはいかない。当然の判断であり、必然の単独行動ではあった。

単身。単独。否。

予想外の援軍として、アーチャーとランサーの協力があつたのだ。

ランサーは早々に姿を隠して神殿内大回廊の何処かへと消えたが、アーチャーとは共闘の形を取ることにになり、神殿の有する特殊効果によって無限再生を続けながら襲い来る岩石製の神獣を破壊し続けて——

そして、目にした。

救世の一矢を。

刀身に施された十三拘束は半分以上しか解放されず、真価を十全には発揮できない聖剣を掲げて一撃を放たんとする自分のすぐ隣で、全力、全霊、あらゆるすべてを懸けて真名解放を行ったアーチャーの姿を。

自らの固有結界にて猛威を振るうライダー・オジマンディアスを倒すには、神殿最奥から主砲として放たれる「デンデラ大電球」の電光を砕くには、完全解放できない聖剣のみでは足りないという実感はあつた。だが、アーチャーの一撃。絶技とも呼ぶべき真名解放を伴う一撃は聖剣の光と相まって、大電光を迎撃し、主神殿を破壊し、固有結界・複合大神殿を崩壊させるのに充分な威力を生み出してみせたのだった。

「——流星一条!!」

円卓の騎士がひとりパロミデス卿よりその勇名は聞き及んでいた。

曰く、大地を割る一矢。

それを成し得る者は地上にただひとり、すなわち、東方の大英雄。かのパリスの地にて並ぶ者なき弓の勇士。長きに渡って続いていたパリスとトゥラン両国の戦争を無血にて終





ナイジェル・セイワード

最初に出逢ったのは池袋、超高層ビルディングとして知られるサンシャイン60の麓に於

魔術師たちに特有の秘められた世界の事情には疎く、聖杯が自動的にもたらず知識以外にはマーリンの言動あたりでしか判断が付かない身ではあるが、そうではあっても魔術師

または、鮮血か。

「きみの言う通りだ、愛歌」

海辺の喫茶店、その窓辺にてセイバーは臉を開く。

瞳に映り込むのは翠色を纏う少女。

一呼吸置いてから、彼は言葉が続ける。

仮初めの肉体を得ながらも既に死した四騎を——誇りを以て光に消えた英雄を、何らかの正義を以て東京を灼かんとした英雄を、無辜の人々を守りながら崩れ去った英雄を、狂気の炎を帯びながら世界を託した英雄を、想いながら。

「聖杯は人の想念によって作られる。……だが、悲しきかな、多くの人間が望むのは善意ではなく、欲望という名の悪意だった」

セイバーが語るのには、端的な事実だった。

だからこそ聖杯戦争が成立する。

儀式の中心たる大聖杯が主の威光をもたらす聖遺物ではなく、万能の願望機として在る理由。魔術協会が全面的に協力し、独自の世界観を持ちながら生きる魔術師たちが死闘へと挑む理由。万人の欲望を溜めたが故に、聖なるものではない何かを多く溜めすぎたが故に、聖杯は、ある意味で変質したのだ。

既に聖杯は真の奇跡を成し得ない。

願望の成就。それは、いと高き場所におわす主のもたらす奇跡のそれではない。

「聖杯は、その発端からして狂っている」
たとえそうだとしても。

この身には——

——セイバーの裡には、ただひとつの願いが在る。今も。

遠く時代を隔てた二〇世紀の当世にあっても、それは、変わることのない決意だ。

叶えなくてはならない。

切なる願いを秘めて聖杯へと集った他者の血を、どれだけ流そうとも。

召喚に応じた時点、現界した時点で、それは既に覚悟していた事柄ではある。

——けれど。

世界。

そう、ランサーは言っていた。

魔力の粒子となって消え失せるのと同時に述べられた、彼女の最後の言葉。

狂気が言わせたのだとは思えない。少なくともあの瞬間、ランサー・ブリュンヒルデが発したのは真実である筈だった。理由は、バーサーカーの時と同じく——瞳だ。経験から来る直感の類であって、理屈や理論の類ではない。

あの瞳を自分は知っていた。

数多く目にしてきた。

死を目前にして願いを託す、あれは、純粹のみを湛えた無垢の瞳ではあった。

忘れる筈もない。幾度、この身が滅びて、無限に等しい現界を果たそうとも、魂が在り続けるのなら忘れはしない。

故に、この身はセイバーとして聖杯戦争へと組み込まれたとも言えるか。

（私の願いは変わらない。だが……）

もしも、とセイバーは自らへ問い掛ける。

——極東へと持ち込まれた地下大聖杯なるものがこの世を蝕む悪であるならば？

「……………」

言葉なく、再び、蒼銀の騎士は双眸を閉ざす。

更なる記憶を視るために。

——遠き時代。同時に、すぐ傍らに在りし戦乱の日々。

再生されていく過去の記憶。

それは、在りし日のブリテンでの記憶だ。

約一五〇〇年前、五世紀当時のブリテン島は苛烈な動乱の渦中に在った。

強大な世界帝国の斜陽という時代の変動を受けて、民族の大移動という巨大な歴史的事象がブリテンへも手を伸ばしていたのだ。具体的には、サクソン人たちが海を越えて渡ってきた。生存のために。だが、ブリテンの土地には限りがある以上、帝国時代、或いはそれ以前より島に暮らしてきた人々と自ずと衝突することになる。

侵略者と、現住者。悲劇的な出逢いであつたと言えるだろう。

ブリテンの人々は、サクソンの人々と相争った。

生きるために。生き残るために。

そして、敵は、必ずしも外より来るものばかりではなかった。

現代で言うところのスコットランド地方に棲息するピクト人たち。強靱な体軀を有する彼らは、時に巨人とさえ呼ばれる強大な異民族であり、戦闘意欲に満ちて攻撃を繰り返す人々だった。更には、大陸に比しても神秘が色濃く残るブリテンの森林、豊かな山野には、容易に人を喰らう大型の魔獣たちが多数棲息していた。

海を超えて襲来するサクソン、島内の巨人、魔獣。ブリテン各地を支配する諸部族も一枚岩ではなかったが故に、内紛とも言うべき争いまでもが多発した。

多くの暴力が島を蹂躪し、村は焼かれ、畑は踏み潰され、多くの人々が死んだ。故国にもはや平穏はなかった。

巨人や魔獣を斃すほどの勇猛の騎士でさえ、民族移動という事象の顛れであるサクソンの猛威に敗れて命を落とすことは珍しくなかった。一人一人は無力な人間であっても、群れともなれば獣に打ち克ち、大軍勢となれば英雄をも殺し得るのだ。

無論、英雄も不意を打たれるばかりではない。

強壮なる一騎当千の騎士や王たちはサクソンや巨人、魔獣に抗い続けた。

荒ぶる力と力はブリテンを舞台として激突し続け、戦乱は続き……最早、血の流れぬ日はないかのように思えた。サクソンと通じて島の統一を目標んだ卑王ヴォーティガーンによって偉大なるブリテン王ウーサーが敗れた日より、ブリテンの明日は暗黒に閉ざされたのだと言う者もいた。

彼が——現在、セイバーとして西暦一九九一年の東京に在る彼が、ウーサーの次なるブリテン王として王位を得たのは、まさしくこの暗黒の時代のさなかだった。

選定の剣を、岩から抜いたのだ。

ウーサー王の補佐として知られる魔術師マーリンが予言したままに。

理想の王となるために。

ブリテンを救うために。

多くの人々を守り——同時に、きっと多くの人々を殺すために。

「ああ、辛い道を選んだんだね」

美しき魔術師が困ったようにそう言ったのを、今も彼は覚えている。

ずっと昔から、既に覚悟は決めていた。故に彼は迷わなかった。

困難へ立ち向かうために剣を抜くのだと、人々のためにすべてを捧げるのだと、人間で

あることを捨ててただひとりの「王」に成るのだと自覚していた。

そして剣を抜いて、彼は、新しきブリテン王となった。

アーサー・ペンドラゴン。

ブリテンを守護する。赤い竜。としてマーリンに予言された、人を超えた王に。

そして。

王位継承より幾らかの月日が過ぎた後のことだった。

幾度かの戦いを経て、新王としての名が島に響き渡り始めた頃か。

妖妃モルガン——父王ウーサーの実際の娘であり、すなわちは姉でありながらも積極的な協力を拒み続ける、どころか幾つもの罠さえ仕掛けてくる——彼女の策略によって、選定の剣を失い、湖の乙女より星の聖剣を授かってからすぐの出来事だ。

卑王ヴォーティガーンの配下であるサクソンの一団が北部辺境に出没しているという噂を聞きつけて、少数の騎士と共に馬を走らせた彼は、いつものように異民族の戦士たちを一蹴してみせた。

真なる竜の心臓を秘めた肉体は、まさに神代の戦士が如く。

数十人から成る戦士の一団を、ものの数秒で斬り伏せてみせたのだった。湧き上がる歓声は味方の騎士や従者のもの、この世のものとも思えぬ絶叫と悲鳴は敵のもの。戦闘自体は一方向的なものだった。

だが、彼は、敵の悲鳴の向こうに何かを聞いた。

何かの——誰かの声だった。

馬から降りた彼は、馬よりも速く駆けて声の主を探した。そして見た。森を抜けた先に存在する集落が、完膚なきまでに破壊されているさまを。牧歌的であった筈の風景は最早なく、家々は碎かれ、火を放たれて、逃げ惑ったのだろう村人たちの血で畑は朱に染まっていた。生きて動く者はいない。家畜さえも殺されていた。

戦場の血生臭さとは異なる、それは、一方的な虐殺を示す光景だった。

サクソンの戦士たちがこれをもたらしたのか。全身が総毛立つ気配を感じながらも、彼は辛うじて踏み留まった。怒りに流されることなく、生存者を探した。

後続の騎士たちがようやく到着する頃になって、彼は、ひとりの生き残りを見つけた。

幼子だった。

家が焼き討ちにあった折、閉じ込められたまま崩落に巻き込まれたと思しい。本来なら家人を守るべき家に、傷付けられたのだ。全身を強く打っており、手足の骨は折れ、内臓にも損傷を負っているのは明らかであり、意識を未だ保っていること自体が奇跡だった。

幼子は、死に瀕していた。

彼の腕に抱きかかえられながら、幼子は言った。

その声はまさしく、彼が先刻耳にしたものだ。言葉の内容も同じく。

「王さま……ペンドラゴンの、王さま……」

うわごとのように紡がれる言葉は、自身を抱く人物がアーサー王であると死つてのものではない。死に瀕しながら、幼子は、主ではなく王に何かを言おうとしていたのだ。

「ほくは、死んでも、いいです……」

「何を言う。そなたは死なぬ。そうだ、このアーサー王が死なせはしない」

「だから、王さま……」

言葉は既に届いていないのだ。

幼子の耳から流れ落ちていく赤色は、内耳に対する損傷を物語っている。

「……妹と、母さんと、父さんを……みんなを……」

妹も。母も。父も。

既に、炎に撒かれて命を失っている。

それを知らぬままに、幼子は、祈りの言葉を続ける。

「……まもって……」

皆を守って――

家族への親愛と安寧を願いながら死す幼子の姿に、自らの犠牲を以て家族や友の救済を願うその最後に、彼は、アーサー・ペンドラゴンは無言を以て応えていた。

深く静かに、王として為すべきことを自覚しながら。

――プリテンを救う。

――あらゆる艱難辛苦から、人々を、守り抜く。

――無辜なる者が平穏を得られる正しき場所を、永遠の王国を私は打ち立てる。



以後の年月。

終わることなき戦いの日々にあっても彼は想い続ける。

卑王ヴォーティガン。白き竜。

斜陽の大帝国との決戦、そして、叛逆者モードレッドとの最後の戦いにあっても。

カムランの丘――

無数の死だけが残された丘。

死の淵に立つても、彼は、アーサー王は求め続けた。

傷と痛みはすべて自分のものだ。たとえ主が相手であっても手放せはしない。そして何よりも、この命など尽きても構わない。要らぬ。

我が魂が欲するのはただひとつのみ。

ただ、故国の救済を。

二度と。もう二度と、幼子が自らの命を差し出すことのない国を。地上に。

――どうか、この地上に。救いをもたらしたまえ。

(つづく)

